

# 「やさし」の底流

万葉

古今

池田敬子

## 序

『古今和歌集』巻十九に次の歌がある。

なにをして身のいたづらにおいぬらん年のおもはん事ぞやさしき

(1063よみ人しらず)

清輔の『奥義抄』に注して「やさしとはづかしと云ふこと也」と言い、『和歌初学抄』由緒詞にも「やさし」の項目を掲げて「恥也」とする。十二世紀なかば頃、『古今集』のこの歌は「やさし」という語に関して注釈を必要としていた。すなわち、「やさし」は既に「恥かし」の義ではなくなっていたのである。中世、「恥かし」の義におけるこの語は「歌詞」として「はづかしきをやさしみといひ」(『今川了俊和歌所え不審條々』)などと、他の歌語と共に列挙されることとなる。

また、『源氏物語』真木柱の

今はしか、今めかしき人を渡して、もてかしづかむ片隅に、人わろくてそひ物し給はむも、人聞やさしかるべし

に関して、『河海抄』は、

やさしは恥かしき也

松浦河この川かみに家はあれと君をやさしみあらはさすありき

何をして身のいたづらに老ぬらん年の思はんことそやさしき

と、証歌をあげて注している。

これらの流れをうけたであろう、月村斎宗碩の手になる「歌詞類聚」といべき『藻塩草』には、次の如く言う。<sup>(1)</sup>

やさしく はつる心也はつかしといふ也世俗にやさしき人なと云

にかはりたり

世俗にいう——即ち、中世一般の使用語彙「やさし」の意味とは異なるものとして、意味の変化をとらえての発言である。既に『和歌色葉』で上覧は、

やさしとははづかしき也。はづかしと思ふはやさしき心なれば也。

と、古今歌におけるこの語の意味を、当代の意味の様相によって「合理的」に説明しようとする姿勢をも示していた。

このように、古今歌の「やさし」に歌語として注釈の必要であった時代——すなわち、院政期以降・中世の使用語彙「やさし」について、「やさしき人」の具体的な種々相を見、「やさしき心」のありようを探りつつ、この語の意味の核を形成する底流を求めてみたいと考える。

注(1) 『藻塩草』のこの項は、『河海抄』の著者四辻善成の晩年の説を反映する

『源氏物語千鳥抄』に、

やさしかるべき はづかしかるべきと也

やさしく とは はづかしきと云事也

(被柱)

(蜻蛉)

とあるような形を一般的な表現にしたものであろうか。「蜻蛉」に關し『河海抄』は「おやにてなきのちにきゝ給へりともいとやさしきほどならぬを」の「やさし」をとりあげて、

やさしとははつかしき(といふ)心也

とし、証歌には古今歌をあげている。

# 一

やさしやな苔のしとねに散りそむる花を衣に重ねてぞぬる

〔散木奇歌集〕卷一

今朝みれば萩女郎花なびかしてやさしの野辺の風のけしきや

(保安二年関白内大臣忠通歌合・野風・俊頼)

俊頼のこの二首にみえる「やさし」は、「恥かし」というこの語を発する主体の情意をではなく、その与えられる対象の状態の属性を表現しており、優美・優雅なことをいう。俊頼は新しい語、変わった言葉を歌に使用した人であり、これら二首も「やさし」が「恥かし」の義から転じて対象の優美さを賞讃する語として使用され始めた時代に、いちはやくそれを歌にもちこんだものであった。<sup>(2)</sup>西行まで下ればその定着はよりはつきりする。

柴のいほにとく／＼梅の匂ひきてやさしき方もある住家哉

〔山家集〕春

急ぎおきて庭の小草の露踏まん優しき数に人や思ふと

(同右・秋・七夕)

弓張の月に外れて見し影の優しかりしはいつか忘ん

(同右・恋・月)

風景・状況の雅びやかさ・優美をいう語として、またその情趣を解する人の感受性・行為を評する語として、女性の姿態の優美さをいう語として、それぞれの「やさし」はある。

散文にあつては和歌におけるより早く『栄花物語』に次の例が見出せる。

又見れば、陸奥守の奉れる御馬率て参りたるなどいひて、いみじき黒駒や、さま／＼の毛どももなる、いみじくやさしく仕立てゝ、十ばかり率て参るめり。よろづに申盡すべき方なし。

(卷十八「たまのうてな」)

御堂の供養の場にふさわしく馬を麗しく優美に飾ったことをいうのであろう。

このように、平安時代末期、院政期にさしかかるころから指摘できる優美・優雅の義の「やさし」<sup>(3)</sup>は、その後使用頻度の増大と共に中世全般に大きく意味の主流を形づくることになる。

さばかりやさしき人／＼業平の五でうきやうごくわたりより、二でう大みやわたりまで人をかきいでゝゆきけんこゝろのうち、さこそはほどとをく思ひけめ。さればかく／＼ゆくさきとをくよもふけぬ／＼いへり。

〔伊勢物語知頭抄〕／＼内引用者

机丁の陰の女房は内にて見るに、うつくしくやさしきもの也。

〔正徹物語〕

実三片田舎ノ者ナレハ争カ紅葉ノヤサシキ事ヲモ可知ナレハ角振舞タリケル也

〔源平盛衰記〕卷二十五

『知頭抄』の例は、女性のみならず男性の場合もその貴族性をとらえて「やさし」と言うことを示している。優美・優雅は当然のことながら高貴さをも含むのである。

かかる諸例の存在は、『類聚名義抄』（観智院本）において「艶」が「ヤサシ・ウルハシ・ナマメイタリ・ナヨ・カナリ」の訓を、「媛」が「ウルハシ・ナマメイタリ・カホヨシ・ヨキラムナ・ヤサシ」の訓を付されていることと表裏一体の語義の広がりの意味する。また、『靈異記』の「嗚呼恥しきかなあしきかな、世に生まれて命を活ひ、身を存ふることと便無し。等流果に引かるるが故に」という景戒の激しい自己の感情吐露の文中で「恥かし」と並べて使われている類義語「あし」は、『名義抄』の付す訓「ヤサシ」に加えて『色葉字類抄』（黒川本）では「アテナリ」も与えられている。これは「あし」という同一の文字の意義展開の上に「アテナリ」という高貴さ、上品さをも位置付け得ることを示しているのである。「恥かし」の義の「やさし」と院政期以降の「やさし」は同一の語の意義の変化であることがこの例からも言えるであろう。さて、寂蓮法師の言葉とされる

歌の様にいみじきものなし。あのをしなどいふ恐ろしき物も、ふす  
あのとこなどいひつればやさしきなり

（『八雲御抄』巻六）

は、『徒然草』にもひかれて周く知られるところであるが、この例は「やさし」が恐しいもの、荒々しいものとは逆の穏かさ・柔和さを含むものであることを示して本章で掲げた例と重なり合うと共に、「歌」と関わることを我々に示している。事実、歌合判詞・歌論書等、和歌の世界において「やさし」は重要な術語でもあった。

注② 俊頼と同時代の基俊は『古今集』にならって「家つとにさのみなおりそ桜花やまの思はんこともやさしく」と詠んでいるが（『基俊家集』）、詞書や判詞では「この歌かへしをやさしくしたりしかば」（同上）「それがなかにも」「下はふ蘆」は今少やさしうぞ見たまふる」（元永元年内大臣忠通家歌合）と、優美・優雅の意に用いている。

③ 進藤義治氏「やさし」の語誌に関する一考察（『南山国文論集』二号）

## 二

院政期から中世の和歌世界にあって「やさし」は艶・優・幽玄などと共に歌風という語として非常にしばしば使用されて来た。が、各々の語は意味するところごく微妙な差異でつながっており、個人によっても託される意味に異なりがあるようで、その概念の定義を明確に下すことは困難である。文字自体ももとより複数の「訓み」を持ち、またいずれの語も複合して用いられる等、艶・優・幽玄・やさしは、ともに重なる部分の特に大きい類義語である。<sup>(4)</sup>

このように難解な問題を含んでいるが、ここでは「やさし」の具体例を検討する事に限定して考察を進めてみたい。<sup>(5)</sup>

『後鳥羽院御口伝』は「やさし」を使用することの多いものである。心あるやうなるをば庶幾せず、たと詞・姿の艶にやさしきを本体とする間、その骨すぐれざらん初心の者まねばど、正体なき事になりぬべし。

△定家評▽

釈阿・西行などは、最上の秀哥は、詞も優にやさしき上、心が殊に

深く、いはれもある故に、人の口にある哥、勝計すべからず。

後鳥羽院の「やさし」は詞と姿という現象に関わるもののようである。この「やさし」は「すなほにやさしき姿」(『毎月抄』)「やさしく物やはらかなるすぢ」(『三五記』)「やさしくおたやかなるうた」(『今来風体抄』)等に通ずる現象の穏かさ・柔和さ・優美さというもので一章の例と範疇を共有するものと思われる。『統歌仙落書』の諸歌人の風体評「やさしきさま」もこの域に入る。「やさしきさま」の比喩として「おぼる月夜」(良平)「大内の花盛り、心あらむ雲の上人いざなひて、暮るゝまでなかもむる心ち」(家隆)「草ふかき籬の中にさきたるあさがほの花」(範宗)といわれるように、いかにもなだらかで美しい「やさし」である。

しかしながら、この現象的なやさしさは後鳥羽院の定家評にもその口吻が感ぜられるように、その行きすぎは非難されることになる。中世、和歌・連歌の世界で絶対的な權威をもった『八雲御抄』にいう。

たゞ艶ならずといふとも、心をたしかによむべし。返す／＼やさしさを好むべからず。いとも此道をしらぬ人は、やさしくて心なき歌を好むなり。……中略……わざとやさばまむとすること、ぜひをはなれて、これをこのみもとむれば、最もみぐるし。歌はやさしきをもちて本とすることなれど、たゞおのれが心によることなれば、やさしく好みよまむにも、好まざらむにもよるべからず。あまりに詞をやさばみて、むすぶれつゞきてのみあるも、返す／＼見ざめする事おほし。是歌道一にかぎらず、管弦音曲なども、おもしろからむと、こしらへちゝまかせば、必ずきゝにくし。たゞ強くとどしく

する事の、功もいりぬれば、面白きやうに、歌も心を本として、其うへ詞を求むれば、自然にやさしきこともあるなり。(巻六)

現象のみに流れた低次元のやさしさを非難する一方で、「歌はやさしきをもちて本とする」と言いきるところに見える「やさし」は、「おのれが心による」ものであり「心を本として」結果的に「自然に」優雅さとして現象するのであって、その本質は深い精神の営みの内にあるものと考えられる。

後鳥羽院の場合、心は詞・姿のやさしさとはわけて論じられていた。しかし、院も定家の「としを経てみゆきになるゝ花のかげふりぬる身もあはれと思ふ」をあげて

述懐の心もやさしく見えし上、ことながらも希代の勝事にてありき。

……先達どもゝ、必ず哥の善悪にはよらず、事がらやさしく面白くもあるやうなる哥をば、必ず自讃哥とす。

と、それぞれ一例ずつ「心」と「事がら」に対して「やさし」を使っている。官途不遇を嘆く心情を、そしてその心情が明らかによみとれる歌の内容——事がら——を「殊勝な」と評するのである。ここでは心情そのものを「やさし」と評価する対象としていることになる。が、院自身「歌の善悪によらず」というように『八雲御抄』のいう歌の本来のありようにつながる心とは別次元のものである。順徳天皇にあっては、単なる心情そのものではなく歌人の心の位相にまで問題は高められている。或は抽象化されている。その心の位相が歌の優雅さ・みやびやかさとして現象するのである。

かかる「心」と「やさし」の結びつきは為兼に至って、明恵の言葉を

借りることにより鮮明に主張される。

たゞ、明恵上人の遣心和歌集序に書かれたるやうに、「すくは心のすくなり、いまだ必ずしも詞によらじ。やさしきは心やさしき也。なんぞ定めて姿にしもあらむ」

〔為兼卿和歌抄〕

明恵は和歌を好んだ人で次のような言葉をも見ることができる。

頌詩を作り、歌連歌に携る事は、強ち仏法にては無けれ共、加様の事にも心数寄たる人が纏て仏法にもすきて、智恵もあり、やさしき心使ひもけだかきなり。心の俗に成ぬる程の者は、稽古の力を積ば、さすがなる様なれ共、何にも利勘へがましき有所得にかゝりて、拙き風情を帯する也。少なくより、やさしく数寄て、実しき心立したらん者に、仏法をも教へ立て見べきなり。

〔梅尾明恵上人遺訓〕

一筋の仏の道の精進をよしとするはずの世界にあって、明恵は詩歌の述作への心の傾倒をそれが仏法に向けられればそのまま「やさしき心使ひもけだかき」ものだと言う。即ち、詩歌に携る際の「やさしき心使ひ」は、一筋の仏の道の修行に通ずるものであった。「心の俗」な者ではなく「実しき心立したらん者」が歌に携る者であり、同時に仏法者でもありうるのである。詠歌の際に細かく神経を行き届かせること、詩歌への深い傾倒が評価される。この心遣いと傾倒は順徳天皇のいう「心」の具體的な作用とも位置づけ得よう。

この傾倒は、登蓮法師の逸話（『無名抄』『徒然草』）などが仏法の要諦と和歌への傾倒の融合の実例であろうが、一種の激しさを含むものである。宮内卿についての『続歌仙落書』の評文は次の如くである。

風体義理を存て心を盡し、ちからを入れてやさしくおもしろきさまなり。賀茂臨時の祭をみるに、冬の夜漸くふけて霰時々うちみだれたるに、月しろくさえて山あめの袖みたらし川にうつるほどをみし心地なむする。

先に引用した諸歌人のやさしさとは異なる清冽な鋭さを想わせる冬の景色になぞらえられる彼女の「義理を存し心を尽しちからを入れ」る詠歌のあり方が、「やさしくおもしろきさま」に直結するのである。そこに「やさし」のこれまでの面とは異なる強さと、激しさを見る事ができる。無論、この冬の景も四季歌の表現する世界のものであって、優雅・みやびなものであることに変わりはない。『水無瀬の玉藻』では宮内卿は人麿について「力かぎりなくつよく、鬼神をもとりひしぐべくして、しかすがにやさしからずにはあらず」と評することになっていて、彼女の好む詠風がどのようなものと思われていたかを『続歌仙落書』と同方向に解しようと共に、やさしさは強さと両立するものとなっていたことがわかるのである。

このように詠歌に直接携る世界の内側からの「やさし」は、一方では「やさしく」ある事が心・詞・姿のあらゆる面で要求される「歌をよむこと」へと拡がって別の視点からも発せられることがある。

何事も御幸ひきはめさせ給ふ余りに、御命さへこちたくて、あまたの帝に遅れさせ給ふこそ、口惜しく侍れ。そのたびに、いとあはれる御歌ども詠ませ給ひたるは、やさしくこそ侍れ。

〔『無名草子』上東門院〕

あわれ深い歌をよんだことを「やさし」と言う。院政期の優れた歌人

源頼政は秀歌をよんだことで「やさ男」（『平家物語』巻四）と言われ、

和歌の才を讃えられて「やさ（し）藏人」と異名をつけられた者もいた（『今物語』『平家物語』巻五など）。鎌倉右大将父子ともに代々撰集に入給ひけるこそ殊にやさしけれ」（『十訓抄』巻十）とも言われる。<sup>(7)</sup>

このように、やさしさの要求される歌をみごとに詠むことが「やさしい」こと——優雅なことであり、感動的なことであり、立派なことなのであった。

或は天性淡泊にして俗塵の事をば愛せず、たゞ詩歌を吟じ泉石にうそぶきて心をやしなふ人あり。……これをば世間のやさしき人と申しぬべし。  
（『夢中問答』）

夢窓疎石の時代に世の人々が「やさしき」人としていたのは、明恵が「心の俗に成ぬる人」を排したように俗事に執着せず、自然をめで、詩歌の世界に生きうる人であった。

更には、『八雲御抄』が管絃の例を引いたように、音楽についても「やさし」は同じ内容をもつ。

管絃者ノ可ニ存知事ハ、ヨロヅヲ心得テ、物ノアハレヲシリテ、心ヲスマシ、ヤサシカルベキナリ。風ノヲトニ心ヲソメ、鳥ノサヘヅリヲミ、ニトゞメテ、世中ノツネナラス事ヲ、返々モナゲキテ、アシキ友ニアフマジキナリ。  
（『教訓抄』巻八）

これらのことから帰納できる「やさしき」心は、自然の風情や詩歌管絃等の情趣に対する感受性、詩歌管絃に携る際に細やかに神経を行き届かせる心遣い、そしてその境地に傾倒しうる強さをも内包する心尽し、<sup>(8)</sup> 更には、これらの可能な「心」そのものの位相なのである。優雅・みや

びはかかる心とその所作であり、所産である。

注(4) 谷山茂氏「やさしく艶——複合美についての一試論——」（『人文研究』二一）

(5) 『平松本古今集抄』では先の古今歌を注するに際し『六巻抄』を引用する形で「やさしきに有二義。一者幽玄の事、二者恥しき也」と記しており、中世での優美・優雅の意味範疇を総合的に「幽玄の事」であらわしているようだ。真淵が『万葉考』に於て概括的に「やさしきはもとみやびたるをほめいふこと」（巻九）とするのと同様、中世人自身が和歌に関わらせつつ「やさし」を「優美さ・優雅さを賞讃する語」であることを大前提としているようである。

(6) 古典大系の補注によれば『遣心和歌集』の現存本は前半を欠いており、したがって明恵のこの言葉を直接にみることはできない。

(7) 頼政以下の例は後述の武士の詠歌等の問題とも関連がある。また「やさ男」は室町時代には穏やかで優美な面が強調される結果、なよなよした弱々しい男の意味にも用いられるようになる。

弁慶さしも雄猛なる人の太刀をだにも奪ひ取る、ましてこれら程なる優男、寄りて乞はば、姿にも声にも怖ぢて出さんずらん。（『義経記』巻三）  
(8) このような観点から、何より心の所作である「恋」も「やさし」の射程内に入ってくる。『兼載雑談』は「恋の歌を常によめば言葉やはらかに心やさしく成となり」と言う。恋の歌を詠むことが重視されたのは言うまでもない。恋は必然的に深い心尽しと詠歌の営みを含むものであったが故に「やさしい」ことであった。「恋」「恋の情緒」をとらえて「やさし」と評する例は多い。

### 三

ところで、前章までに見て来た「やさし」は和歌にしろ音楽にしろ貴

族の世界のものであると言つてよい。自然の美をいう場合も四季歌が見出して来た美に関わるようである。しかし、これらの優雅・みやびとは全く異なる場面と人々に関して発せられる例が中世にはかなりの量をもつて存在する。

にくみ剛の者哉。我矢頃に寄てひかへたり。只一矢に射おとさんと思へ共、餘にやさしければ、誰か有、あれ引さげてこよ。一目見ん。  
〔保元物語〕中古活字本

あなやさし、如何なる人にてわたらせ給へば、御方の御勢は皆落ち行き候に、唯一騎残らせ給ひたるこそ優に覚え候へ。名乗らせ給へ。  
〔平家物語〕巻七流布本

「……父が打死ノ所ニテ、同ク命ヲ止メテ、其望ヲ達シ候ハン」ト、慇懃ニ事ヲ請ヒ泪ニ咽デゾ立タリケル。一ノ木戸ヲ堅メタル兵五十餘人、其志孝行ニシテ、相向フ処ヤサシク哀ナルヲ感ジテ、則木戸ヲ開キ……  
〔太平記〕巻六古活字本

これらは武士の猛々しい振舞を賞讃する「殊勝な」「健気な」という諸例である。<sup>(9)</sup>為朝に果敢に立ち向う兵への為朝の言葉、味方総崩れの敗戦の中で討死覚悟で踏み留まって戦い続ける実盛に手塚太郎がかけた言葉、そして親の甲合戦をと単身敵陣に切りこんだ者へ守勢の兵達の反応、といずれも戦況不利の中、討死覚悟むしろそれを当然として戦いを挑む者を「やさし」と賞讃する。優美や優雅とは遠い地点にあるこれらの行為、かつ、貴族とも異なる階層の猛き武者の武きふるまいが「やさし」と評されるのはなぜか。それは、前稿において指摘したごとく行為の背後にある武者の決意・志をとりあげその心尽しをめであるのであ

り、そこから先述のすぐれて心に関わる「やさし」の領域にこれらの行為と心情が入って来るからではあるまいか。事実、その心・志を明確にする例にしばしば遭遇する。

都合其勢二百五十騎、三万餘騎ノ敵ニ懸合セント志シテ、命ヲ塵芥ニ思ケル心ノ程コソ艶ケレ。  
〔太平記〕巻十六

げにや日本国名將軍の貴辺にして、こゝにしのび、かしこにまはり、命をすて、身をおしまで、敵を思ふ心中、やさしといふもあまりあり。  
〔曾我物語〕巻五古活字本

弟の平三影光兄をうたせてくちをしく思ひければ、安積にきつてかゝる。安積にことわらひ、あらやさしの影光や。侍のならひとて兄をうたせて身をすてんとおもふ心ざしこそあわれなれ。  
〔嘉吉物語〕

このように武者の命を物の数ともせぬ激しい行為は、その奥に潜む心情をとりあげてそこに焦点をあわせる時、精神の傾倒とそれをとらえ一種の「数寄」の顕現としてみれば、明恵の言う「やさしき心使ひもけだかき」から遠い距離ではないであろう。また宮内卿の歌の「風体義理を存て心を盡し、ちからを入れてやさしくおもしろきさま」とも照応すると考えられる。命を塵芥の如く扱うことは俗塵に執せぬことにもつながる。

『今物語』に次の話がある。

能登前司橘長政といひしは、いまは世をそむきて、法名寂縁とかや申なんめり。和哥の道をたしなみて、その名きこゆる人也。新勅撰えらばれし時、三首とかや入たりけるを「すくなし」とて、きりて

いでたりける。すこしはげしきには似たれ共、みちをたてたるほどは、いとやさしくこそ。

(第十一話・前半)

激しくはあるがと留保しながらも、その激しさを産み出す歌の道を立てる心を讀えるものである。このように歌の世界にあっても激しくその道に傾倒して、ある面では命をかけた人々が称揚されるのもあった。『さゝめごと』に「やすく」と出で来べき道とは見えずや」として高名な歌人の心身の傾倒を列挙している。

紀貫之は一首を廿日に詠ぜしとなり。

宮内卿は血を吐きしといへり。

公任卿はほの／＼の歌をば三とせまで案じ給へるといへり。

長能は歌を難じられて死す。

もろこしの潘岳とやらんは、詩を沈思して三十ちにて白翁になれるといへり。

ここに範としてあげられる「道に心ざし深くしみこほりたる」人々の生き方と、命を塵芥の如くに敵に向う武者達のあり方とは決して別ではない。内奥の精神の傾倒は同じ脈流でとらえる事が可能であり、心を碎き、心を尽しての結果として出現する現象が、片方は文化の最高峯たる和歌・連歌の道にであり、一方は家や国の命運をかけての合戦にと異なる方向をとったまでのことである。

そして、心情を対象としていう「やさし」は更に次のような展開をも見せることになる。

保元の乱の中、為朝は兄義朝にむけて弓をひきしぼる。が、あらためて考える。

兄ヲアヘナク射殺テ、重テ不孝セラレテハ如何アラント思直テ、矢ヲ指弛ス。為朝ガ心ノ内、ヤサシウ情ヲ弁ヘタリケル。

(「保元物語」中半井本)

すばらしい活躍をする秋山を敵の忠実が自らかばう。

秋山件ノ棒ヲ以テ、只中ヲ指テ當ル矢二十三筋マデ打落ス。忠実モ情アル者也ケレバ、今ハ秋山ヲ討ントモセズ、剩御方ヨリ射矢ヲ制シテ矢面ニコソ塞リケレ。カ、ル名人ヲ無代ニ射殺サンズル事ヲ惜テ、制シケルコソヤサシケレ。

(「太平記」卷二十九)

為朝や忠実の「やさし」と評される行為は彼らが「情」ある人物である人物であることと一体の事としてとらえられる。『平治物語』では、悪源太義平が手負いの味方の兵の首を敵にとらせじと味方の手で討たせたことを、金刀比羅本が「弓取のならひほどあはれにやさしきこととはなし」と記し、古活字本は兵自身に

わかき大将にておはしませば、是までの御心ばせ有べしとこそ存ぜぬに、かばかりの御情ふかくわたらせ給ふ者かな。心やすく臨終せんと語らせる。そこにあるのはつきつめた心情とは異なる配慮——ゆとりある思いやり・情ある心であり、心遣いである。

(巻中)

情あることと「やさし」の結びつきは、節用集の「やさし」の文字に「艶・優・花容・詭」などと共に「有情」が検出されることによって、現代語「やさしい」の主な意味である「思いやりのある」とほぼ同義の「やさし」が、中世既に誕生していたことを知るのである。

さて、武者の世界と貴族の詩歌管絃の世界の合流した「やさし」も見



出せる。

あないとほし、この曉城の内にて、管絃し給ひつるは、この人々にておはしけり。当時御方に東国の勢、何万騎があるらめども、軍の陣に笛持つ人はよもあらじ。上臈は猶も優しかりけるものを。

〔平家物語〕卷九

武門の子敦盛と言えど東夷熊谷にとつては貴族であつた。貴族の文化・教養のたしなみである詩歌管絃、その一である笛を戦場に持参し、奏したこと、それは貴族のたしなみの優雅さと命がけの戦陣にまでそれを持ちこみえた心の強さとのあらわれであり、双方を讃えての「やさし」である。

待シバシ死出ノ山辺ノ旅ノ道同ク越テ浮世語ラン

年来嗜弄給シ事トテ、最後ノ時モ不忘、心中ノ愁緒ヲ述テ、天下ノ称嘆ニ残サレケル、数寄ノ程コソ優ケレト、皆感涙ヲ流シケル。

〔太平記〕卷十

辞世詠であるが、<sup>124</sup>ここには先に江州番場で自害した子息を思う心遣いまでがこめられている。「やさし」と言われる理由は本文がじゅうぶんに説明し尽しているよう。

貞任等たへずして、つめに城の後よりのがれおちけるを、一男八幡太郎義家、衣河においたてせめふせて、「きたなくもうしろをば見する物哉。しばし引かへせ。物いはん」といはれたりければ、貞任見帰りけるに、

衣のたてはほころびにけり

といへりけり。貞任くつばみをやすらへ、しころをふりむけて、

年をへし糸のみだれのくるしさに

と付たりけり。其時義家、はげたる箭をさしはづして帰にけり。さばかりのたゝかひの中に、やさしかりける事哉。

〔古今著聞集〕卷九・武勇十二

一方は敗戦の将、命の瀬戸際での連歌であり、他方はそれに感じて命を助ける。双方のみやびと余裕・心遣いを讃えるのである。

かかる「やさし」はより広くは「武士が歌をよむこと」を評する方向へも流れて行く。これは前章で指摘した、歌をよむことを「やさし」で評価することと相通じる。武士や、彼ら同様、貴族の文化の世界には縁遠い庶民や田舎者が歌をよみ、又それを理解することをほめて言い、その場合には「よくやった」という上から下への視線をもって意外感と共に発せられる。これは武者の猛々しい振舞の例にも指摘でき、「やさし」の使用される文脈の付帯条項ともなっている。

詩歌ハ朝廷ノ翫処、弓馬ハ武家ノ嗜ム道ナレバ、其價未必シモ、六義数寄ノ道ニ携ラネドモ、物相感ズル事、皆自然ナレバ、此歌一首ノ感ニ依テ、嗷問ノ責ヲ止メケル、東夷ノ心中コソヤサシケレ。

〔太平記〕卷二

物くさ太郎……御返事

よろづ世の竹のよごととそふふしのなど唐竹にふしなかるべきあな恐ろしや此男は、我と寝んといふ、また姿には似ず、かゝる道を知りたること、やさしさよと思召て……

〔物くさ太郎〕

更に今一つ、「やさし」への宛字に「矢指」などが見られる(たとえば天正本『太平記』など)ことは、武者のいかにも武勇らしい勇猛果敢な振舞

を「やさし」ということからは自然ではあるが、ここにも和歌文脈の伝統をみるのが可能なのである。

ねらひするしづをのこしましなへたるやさしき恋も我はするか  
な

ねらひといへるはしかをとる事なり。……こしに矢をさしたればやさしきとはそへよむなり。 (『俊頼髓脳』)

やまがつの心詞いやしくて野中のしみづ流れぬ名なれば、谷のむもれぎ人にもしられぬに、しかのねらひのやさしき人々とよのあかりのおもしろき心のあまりに…… (『和歌色葉』)

和歌の懸詞に「矢指」は淵源をもつ。かかる宛字を支える歌の伝統をみることは、健気で殊勝な武者達のありようをいう「やさし」が、「艶し」と表記せられることも相俟って、本章でとりあげた例が決して特殊な、流れから孤立した例ではないことを示しているのである。極言を恐れず言えば、貴族の詩歌管絃・それに携る心の優雅をいう「やさし」は、すぐれて心の所作・心自体の位相をいうところから強さ・激しさを内包する意味範疇を形成することにより、そこに武者の志・振舞をも「優雅な」ものと把握する展開を同時になしとげたのである。

注(9) 筆者は以前『太平記』までに限ってではあるが軍記の中で武者に対していわれる「やさし」について検討したことがある(「やさし」軍記の武者像)『論集日本文学・日本語』3中世所収。旧稿との重複はなるべく避けたが、叙述の都合上、一部重複する用例を敢えて使用した。

(10) かかる意味の「やさし」は無論軍記と和歌関係に限られるものではない。いしくま童子かね童子其外門を固めたる、十人餘りの鬼共が此よしを見

るよりも、今は童子もまします、いづくをすみかとなすべきぞ、鬼の岩屋もくづれよと、おめき叫んでかゝりける。六人の人々は此よしを見給ひて、やさしのやつばらや手並の程を見せんとて……

かほど不得心成男を頼みしわれこそあさましきれとて髪剃り落し出家せんと、たゞ一筋に思ひ定めし女房の、心のうちこそやさしけれ。 (御伽草子「酒吞童子」)

(11) 節用集の記述を一部例示する。

文明本(ヤサシ) 有情 花容 花盛 艶

天正本(ヤサシ) 有情

易林本(ヤサシ) 優 艶 婀娜

書言字考(ヤサシ) 艶 優美 有情 詭 矯

『日葡辞書(ヤサシイ)』にも「節度があり、いい育ちで、愛情のこもった人」との解説を見る。

「情」を「やさし」とよむ例もある。

浮節ニ沈ミモハテ、川竹ノ世ニタメシナキ名ヲハナカシツ

ト世ニハイカニメ漏ケルヤラン哀ニ情シキ様シニソ申ケル

(『盛衰記』巻二)

この古活字本の振仮名は後に施されたようであるが、蓬左文庫本、近衛本(京都大学附属図書館蔵)はこの部分「やさしき」と仮名書きである。仮に古活字本が「ナサケシキ」のつもりであったとしても「情シキ」は「やさしき」と同義と判断してよからう。

(12) 『袋草紙』には「希代歌」として「臨終歌」を挙げる。死に際しての詠歌が清輔の時代から「希代」の事として記録に値したならば、武者の辞世詠はなおさら賞讃されるであらう。

#### 四

前章までの検討から、現象上の文脈の意味はさまざまであっても、

「やさし」が発せられる際には対象の心遣い・心尽しというべき点を賞讃するという、この語の意味を形成する核を指摘することは承認され得るであらう。

さて、「やさし」が心遣いの意をもつことを言われる場合に、語源を「痕す」と想定することからの意味の流れに位置付けてしばしば例に出される『大鏡』の一節がある。<sup>13</sup>

人のたてまつりたる贄などいふものは、御前の庭にとりてをかせ給て、よるはに弔殿におさめ、ひるは又もとのやうにとりいでつゝをかせなど、又人のたてまつりかふるまではをかせ給て、とりうごかすことはせさせ給はぬ、あまりやさしきことなりな。人などのまいるにも、かくなんとみせ給れうなめり。むかし人は、さる事をよきにはしければ、そのまゝのありさまをせさせ給とぞ。(卷三師尹伝)

先学の御指摘のとおり、この「やさし」は進物の品を毎日倉と庭とを往復させ披露する心配りが、余りに氣を使いすぎる、というのである。とすれば、中世、行為・現象の背後の心遣い・心尽し等を取りあげて評価する「やさし」のあり方が、『大鏡』にあつてはまさに「氣を使う」ことを露出させていたことになり、「やさし」の語義の底流そのものをここに確認できることになる。

しかしながら、『大鏡』のこの一節はもう一つの視点をも我々に指ししめす。それは「むかし人はさる事をよきにはしければそのまゝのありさまをせさせ給とぞ」が、師尹の子息済時の行為を昔人がよしとした先例に則る・踏襲するものと解釈することを要求する点にある。「あまりやさし」い彼の行為は一面において、先人の残した規範をそのまゝ当

代にあつて繰返すことでもあったのである。済時の場合は行き過ぎとして批判的口吻で語られるが、肯定的に評価される例を、院政期以降・中世を通してしばしば発見する。

承保三年十月廿四日、大井川に御幸せさせ給ひて、嵯峨野に遊ばせ給ひ、御狩なむどせさせ給ふ。その度の御歌、

大井川古き流れを尋ねきて嵐の山の紅葉をぞ見る

なむ詠ませ給へる。昔の心地して、いとやさしくおはしましき。

〔今鏡〕すべらぎの中・紅葉の御狩)

うつ山こゆるほどにしも、阿闍梨の見しりたる山ぶしゆきあひたり。夢にも人をなど、むかしをわざと、まねびたらんこゝちして、いとめづらかに、をかしくも、あはれにも、やさしくもおぼゆ。

〔十六夜日記〕

歌論の類はより明確な表現をとる。

又古の歌のやさしく、いかなる世にもありがたくおもしろくやさしき心言葉をこそ、今の世にも上手と覚ゆる人々は好みよみあはれ候めれば、昔今かはるべきにもあらず。

〔夜の鶴〕

現代の優れた歌人は「やさし」と評価される既に価値の定まった古歌の、その内でも「おもしろくやさしき心言葉」をとりこんで歌を詠む故、昔も今も歌のよさはかわらぬ、という。

中山内府へ家中興遊酒宴ナドノ次ニハ、毎度ニ上句ヲ古歌ヲカキテ、いひし人もおもひいでらると毎度ニ書。尤優にやさしき事也。

〔八雲御抄〕卷二)

古歌の上句をそのまま書き、下句を「といひし人も思出らる」と詠ん

だことを強く賞讃するのである。

昔を重んずる、いにしえの規範に則ることをよしとする姿勢は次の如き説話も包含する。

橘為仲かよ、陸奥守にて下るに、白河関を通るとて、長持より狩衣指貫とりて着しければ、具したる者ども、こはいかなることにかと云ひければ、白河の関をいかで見苦しげにては通らむぞといひけり。やさしきことなり。

〔西行上人談抄〕

歌枕の地に対して威儀をつくろうことが賞讃の対象となる。「昔人のよきにし」た事は、権威であり、規範であり、それを尊重し、則ることを要請するものであった。

△忠度が△関も昔の跡と詠める事は、先祖平將軍貞盛、俵藤太秀郷、將門追討の為に、東へ下向したりし事を、今思ひ出でて詠みたりけるにや、いと優しうぞ聞えし。

〔平家物語〕卷五〕

さても△和御前をば志賀の都の梟、心は東の奥のものにこそ思ひつるに、「色をも香をも知る人ぞ知る」△古今歌△と仰せられける言葉の末を弁へて、貸しぬるこそ優しけれ。

〔義経記〕卷二〕

これはまた隅田の川の東まで、思へば限りなく遠くも来ぬるものかな、さりとは渡し守り、舟こそぞりて狭くとも乗せさせ給へ渡し守り、さりとは乗せて賜ひ給へ。かかる優しき狂女こそ候はね、急いで乗られ候へ。

〔謡曲「隅田川」〕

忠度の例は、將門追討大將軍として貞盛が東国へ下った著名な史実をふまえての詠歌で、しかも貞盛は忠度にとって範とすべき先祖でもあったのである。『義経記』の例は『古今集』の知識と活用をいう。しかも

文化・教養程度の低いはずの田舎女が、かの古今歌を下句のみでそれと知って義経を我家へ招じ入れた。そのことがほめられるわけである。同様の事は狂女が『伊勢物語』を口にする「隅田川」にも言える。これらの例は、故事・古歌・物語をふまえた、または理解しての詠歌や行為が評価の対象となるという事でもある。先に挙げた実盛の場合、ただ死を決して一人戦ったのみならず錦の直垂を次のような事情で着用していたのでもあった。

「……実盛元は越前国の者にて候ひしが……中略……事の譬の候ぞかし。故郷へは錦を著て帰ると申す事の候へば、何か苦しう候べき。錦の直垂を御免候へかし」と申しければ、大臣殿、「優しうも申したりけるものかな」とて、錦の直垂を御免ありけるとぞ聞えし。昔の朱買臣は、錦の袂を会稽山に翻し、今の斎藤別当実盛は、その名を北国の巷に揚ぐとかや。

〔平家物語〕卷七〕

『平家』の本文が説明するように、中国の故事に倣う心と行為が、彼に対する賞讃をより強めることとなった。

このように「昔人のよきにし」た事は、院政期以降・中世にあっては、歌・物語・漢詩文という文化教養の古典を最たるものとして、その知識があること・現在の行動にそれをいかすことによって、人々が「やさし」と讚美できるのであった。勿論、そこに心を廻らしうするという心遣いの存在を指摘できるものではある。が、同時に規範に則ることをよしとする意識・心情が一方に大きく存在することを看過するわけには行かぬであろう。

そして、かかる文化・伝統の規範意識は文の世界と共に武の世界の先

例をも「規範」として含みこんで来る。『平家』巻五の貞盛の故事をうけた詠歌の例にもそれがうかがえる。また『太平記』巻三十三「京軍事」の二宮兵庫助の話は「やさし」の語を現象させてはいないが、実盛の最後が既に武者達の模範となっていて、「昔ノ実盛ハ鬢鬚ヲ染テ敵ニアヒ、今ノ二宮ハ名字ヲ替テ命ヲスツ。時代隔タルトイヘ共其志相同ジ」と記されている。<sup>14</sup> 実盛がやさしいならば彼と志を等しくする二宮をもやさしいと『太平記』の評価を読みとることが可能である。

「やさし」の底流に規範意識をすえてみる時、前章までにとりあげた例もこれから完全にはずれるものではない。『さゝめごと』に列挙された歌人達はその道の範として中世歌人達の手本であつたろうし、戦線で果敢に戦い、死んで行く兵達も武者として要請されるあるべき様に従つた武者の鑑であつたろう。優美・優雅なさまをいう「やさし」もそれが貴族の文化の高峰である詩歌管絃に関わることから、「やさしきを本とす」とある通り、やさしさがそのまま、あるべき理想像という転換的な視座から規範性を見出すことが可能だと言えよう。<sup>15</sup>

八雲の御抄にも、稽古といへばとて、あながちに天竺もろこしの文をつくせにもあらず。万葉・古今集・伊勢物語などのうちなるべし。ふるまひの艶に言葉のけだかきは源氏・狭衣なり。此等を少しもながはざらん歌人は無下の事、と古人も申し侍り。

（『さゝめごと』）

「やさし」に見られる第二の意味の核をなす底流たる規範意識——特に文の伝統に則ることのより鮮明な主張を、中世人自らの言葉としてここに見る。

このことは、中世、歌・連歌の世界内部の要請から古典の注釈がさかんに行われたことと別ではない。あるべき姿の歌をよむため、連歌を行うために心敬があげた諸書は熟知され、読みとかれねばならなかった。古代からの伝統を身に引き受ける事なしには当代の文化になう事はできない。これは如何なる時代にあつても当然であろうが、中世にはこのことが非常に意識的に尖鋭に要請されたようである。歌・連歌だけに限らない。例えば『平家物語』の異本の極と言われる『源平盛衰記』は物語の流れを断ち切りながら、故事出典に関する解説・逸話を挿入し、さながら『平家』の注釈か百科事典の如き様相を呈し、『太平記』や『曾我物語』も物語の本筋の話の前後に何かと故事・先例を述べる条をさしはさむ。謡曲に至っては極言すれば全篇これ出典尽しと言えよう。そしてこのような『太平記』や謡曲に注する『太平記抄』・『謡抄』共に、故事・出典の解明に全力を尽すのである。斯様に中世の文学活動のほぼ全般にわたって「古典」という規範の存在が指摘できもするのである。

殊に和歌・連歌は、その世界内部において、万葉・古今・伊勢・源氏という文学伝統の規範を重く担っている文化であると共に、和歌の三十一文字自体が文化そのものの、その象徴として非常な価値をもつものであつたようである。それには本来関わり得ないはずの文化的劣位者たる武士が歌・連歌に携ること、田舎人が歌を詠み、その知識を有することが「やさし」と評価される諸例がそれを物語るであろう。「優雅」なことに本来は優雅でない者達が関わる——それは一見みやびな振舞ではあるが真のそれではなく、「感心な」「殊勝な」努力として評価される。「やさし」の発せられる場面の奥には複数の次元があるのである。<sup>16</sup>

中世の武士や庶民達にとっては歌・連歌に代表される当代の文化そのまゝ則るべき規範であった。さらにもう一段次元の高いところには、文化に携る者が当然ふまえるべき規範として既に前代において価値を認められていた文学的伝統が存在する。それらを尊重すべき「古典」として認識し、熟知し、自らの営みの内に規範的「出典」としてそれをふまえ、活用することが、優雅中の優雅として強く要請されていたのである。このように、規範に則ることをよしとする意識を「やさし」はその底流として、それぞれの場面・文脈において自らを現象させているのである。

注⑬ 「やさし」の語源として「稗す」を挙げるものには『大言海』、大野晋氏『日本語の年輪』、原田芳起氏『平安時代文学語彙の研究』、阪倉篤義氏『日本語の語源』がある。原田氏・阪倉氏は『大鏡』のこの例についてもそれぞれの著書で言及しておられる。

⑭ 謡曲「実盛」では彼が白髪を染めて戦ったことをとりあげ「やさし」と言う。

墨は流れ落ちて、元の白髪となりけり。げに名を惜しむ弓取は、たれもかくこそあるべけれや、あら優しやとて、皆感涙をぞ流しける。

⑮ 『愚管抄』の例は、身の処し方として節度ある、まさにあるべき理想的なこととして「やさし」が使われている。

時ノ君ノ御器量ガラニテ、カツハヤカル、コト也。ヨノスエハ、ミナ君モ昔ニハニサセ給ズ、マコトノ聖主ハアリガタケレバ、イマハ様ノ事ト摂政関白ノ名ハタフルコトナシ。ソレモ御堂ノハジメ、一条院、三条院、知足院殿ノハジメ、堀川院、コノフタ、ビハ内覧バカリニテ、関白ニハナラセ給ザリケリ。ヤサシキコト也。

⑯ 松尾章江氏「源平盛衰記素描——その意図と方法——」(『国語と国文学』昭和五十二年五月)

⑰ 歌を詠みうることは能であり芸であるともとらえられることがある。

勅なれば身をばよせてき武士の八十うぢ川の瀬にはたゝねど  
此曲、武蔵守に早馬を以て申たりければ、免すべしとて、師弟三人ながら被<sub>レ</sub>免けり。人は能芸を嗜<sub>レ</sub>べき物かな。末代と云ながら、和歌の道もたのみあり。泰時やさしくも免されたりと、上下感じけり。

(『承久記』下前田家本)

中世において「やさし」の指ししめす文化的規範は殊に歌に關して突出した重要性を示しながらも、能・芸ととらえられるところからより拡がりをもつ。

又坂西ノ次郎長国ハ者、心太タ 優長ニシテ而嗜<sub>レ</sub>文武之芸ニ随分ニ珍重ノ男也。

(『大塔物語』)

「文武の芸」を嗜む「やさしの男」と言われるところに「やさし」の裾野の広がりを見ることができよう。また『小松軍記』に「加程ニ急ナル其中ニモ武夫ノ心ホドヤサシキ事ハナシ」として紹介される逸話は、女房の持つて来た酒ほしさに昼寝をやめて一合戦し、分捕った首を女房の前に投げ出したところ

女房打笑、其首ハ御辺ノ高名ニ非ズ。此酒罎ガ仕懸也トテ打傾テ見セケレバ、出口頭ヲ抵テ、汝ニタラサレテアダ骨折ソルヨト云ケレバ江口モ南部モ笑ヒニケリ。

と、まるで狂言をみるごとき場面である。合戦の一面面がそのまゝ「芸」になってしまったようであり、「やさし」の指し示す文化が当代の庶民のそれに密着して来た印象を与える。

また先の「珍重」の訓みについては、『大塔物語』の他箇所「優ニ珍重シキ様也」とあること、並びに真名本『曾我物語』の数ヶ所の「珍重」に本門寺本付訓では「ヤサシ」とすること等から、「やさし」とよむべきであると思われる。対象を賞讃する語であることがこの文字使用に顕著にあらわれている。

## 結

ここで、「やさし」の『大鏡』以前の歴史をふり返って、前章で指摘した規範意識がそこにも存在するかどうか点検しておきたい。本稿冒頭に掲げた『古今集』は「年の思はむことぞやさしき」であった。そして平安時代は『源氏物語』真木柱同様、多く「人聞きやさし」の形がとられる。

あまたの人の、心ざしおろかならざりしを、空しくしなしてしこそあれ。昨日今日御門のの給はんことにつかん、人聞やさし。

(『竹取物語』)

あなものをぐるはしや。人ぎゝこそやさしけれ。御かたのおとゞや、かやうのときゝ給らんとおもふこそおもてはづかしけれ。

(『宇津保物語』国譲上 前田家本)

「年」・「人聞」共に自分の力では如何ともしがたい、いわば絶対の所与である。又、一章であげた『靈異記』の景戒の序は仏教者として絶対を要請されるあるべき生き方に従い得ぬ己れの「恥」であった<sup>108</sup>。そして『万葉集』の憶良の「貧窮問答歌」の反歌

世間乎宇之等夜佐之等於母倍橋母飛立可祢都鳥尔之安良祢婆

(巻五・八九三)

に見えるのは「世間」に対する恥の感情の告白であり、「よのなか」こそ人間に対して規範性をもって迫ってくる絶対の所与の最も典型的なものではあるまいか。

これらの「恥かし」の義の「やさし」に見られるのは、自分個人の力では変えようのない規範にてらしての恥の感情である。「規範」のあり方は異なるが、やはり文献初見の例以来、沿うべき規範を意識するところから「やさし」という語が発せられることに変りはないのである。

一方、「恥かし」という主体の情意表現の語であった出自は、対象の属性・状態等に対する客観的判断を示す語に移りながらも、すぐれて心に関わる心遣い・心尽しを讃えるという意味に於て、情意・心情を対象とすることにより、微妙な情意表現<sup>109</sup>ともいふべき語となり、その息づかいを通わせ続けていたと言ふことができよう。

上覚の発言に再び戻ってみる。

院政期・中世の「やさし」の様相に従えば、主体の情意である恥を表現する機能はすてられながらも、心の情態に深く関わる語として、細かく神経を行届かせる配慮・心遣い・情ある思いやりや、強さを内包するものとして深い心の傾倒・決意をたたえるものであった。歌の世界で『八雲御抄』が抽象度の高い心の位相そのものを問題とし、現象に激しく顕現する心情・行為を対象とするものとして軍記が、それぞれ突出した峰をなす。更に今一つ、伝統的貴族文化という規範にてらしての心の所作・所産をほめいう流れがあり、その文化的伝統は歌・連歌に関わるところが主峰をなしている。規範に則り——すなわちあるべき様を自覚しつつ、深く細かく働きうる心を有する人が、同時に恥に対する鋭い感受性をもちうると上覚が考えたのは当然であろう。

上覚が「はづかしと思ふはやさしき心なれば也」と注したことは、現代人の目には循環論であり「合理的」解釈からはずれていても、このよ

うな中世の使用語彙としての「やさし」の様相にあつては、きわめて正確な発言であつたと言わねばならない。<sup>(18)</sup> 上覚は彼の時代の使用語彙の様相から古今歌を「合理的」に解釈しようと試みる。彼の発言は「やさし」が二つの底流の中から具体的現象に即しては様々な広がりを持ち、或は鋭さを獲得しながらその世界を構築して行く中世の動態の中にあつて、「やさし」の本質をよくとらえたものであつた。ただ、彼の誤りは古今歌に対して中世人の目のみで発言したことだったのである。

注18 仏に対する恥をいうものには中世の作品である『宝物集』にも次の例をみる。

仏のおぼしめさん事もやさしければ、此花をも見捨、月花門のかた様に  
出れば……  
(巻一・九冊本)

但し、この説話にはおそらく出典があると考えられ、中世の用法というより平安時代のものであろう。

なお「恥」の意の「やさし」が歌に使用されているのは院政期以降では『新勅撰集』にとられている清輔の長歌、『拾玉集』の一首等である。

(19) 阪倉篤義氏『語構成の研究』に「情態言」なる術語の提唱がある。

「情態」の文字をわざともちゐたのは、「状態」といふ語の、やや外形的なすがた・ありさまを思はせるのをさけて、さらに内面的なおもむき・ありかたを、この種の語が表現するものであることを、あらはしたいからに他ならぬ。

(三〇六頁)

注(5)で言及した真淵の見解は『万葉集』の憶良の歌についてのもので全文は次のとおりである。

やさしきはもとみやびたるをほめいふことなれど、そのみやびにわがさまのおよばねばそをはづかしむ意となるをもて、はづかしき意とも転いふ也。

上覚の発言とは異なり、中世を通過したのち、それを総体としてとらえて

の発言であり、語史の把握の逆転・「はづかし」との混同はおくとしても、上覚とは異質の次元からの解釈であると言えよう。

(本学非常勤講師)

原稿受理 一九八〇年九月五日



## Implications of the Word "Yasashi"

Keiko Ikeda

The word "Yasashi" appeared already in the Manyo period, and in the Insei period or in the Middle period its range of meaning broadened, as it was often utilized in the literary works. In many works, the word "yasashi" played an important role.

This paper probes into the core of meaning of the word "yasashi" through examples in various contexts. We can extract two main standpoints from this examination of the use of the word in the Medieval period.

On the one hand "yasashi" implies praise for working mind sufficiently of other people with its various manifestations. On other, it is praise for the state of mind or behaviour of another person, according to some normative standard already acknowledged as valuable.

Before the Medieval Ages, however, from the Manyo period to the middle part of the Heian period, "yasashi" was an expression of subjective emotion in dirating shame at finding oneself to fall short of or be out of some absolute standard. We can assume this feeling of shame is related to working mind sufficiently.

Thereafter, although "yasashi" has changed from implying a sense of shame to praising other people, it retains the essential characteristics of working mind and correlation with some standard, and the new meaning this word acquired during the Insei period or the Middle period is not essentially different from or contrary to the original. The core of meaning has not changed.